

親を生涯発達の観点から捉える試み（その6）

——子どもの発達に伴う親の変化——

Parental development from the viewpoint of life span development (Part 6)

: Parental development with children development

林 昭 志

Hayashi Shoji

要旨

本研究では、親が子どもの発達に伴って様々な側面で変化していくことをアンケート調査で明らかにすることを目的とした。まずこれまでの筆者の研究を概観した。次に家族の個性と類似性について考察した。次に両親を対象とした調査を報告した。本研究では、実際の子育てと予想との違い、親としての人格的・人間的成長、親になってからのものの考え方の変化、子どもから受けた影響、親子や家族の行動の類似性、子どもとの接し方の変化、悩みの変化、現状の認識などを尋ねた。

キーワード：親、子ども、家族、生涯発達、子育て

1. これまでの研究の概観

これまでの研究を概観すると内容の趣旨は次のようにまとめられる。

子どもがいる限り親であり続けるわけであり親は生涯にわたって発達していく（林、2005）。子育て支援は親の生涯発達を援助することでなければならず、親と家族の発達を長期にわたって援助することである。つまり親子の発達を支援するとは生涯発達の観点に立って支援することである。また親の何が発達するかということに関しては人格と認知の側面が考えられる（林、2006）。

そして子どもが発達する権利（子どもの発達権）を持っているのと同様に親も発達する権利（親の発達権）を持っている（林、2007）。さらに家族自体が健全に発達していくことが子どもにとって大切なので、家族が発達する権利（家族の発達権）を持っていることになる。つま

り家族のすべてのメンバーが子育て支援を受ける必要性と権利（支援を受ける権利）があるということである。

また子どもの人数は親にとってはきょうだい関係に対処するかどうかに関わる大きな問題である。しかし子どもの人数が（3人以上に）増えても家族内の人間関係の複雑さの増加率は減少する。まず、子どもが1人いる（子どもの誕生）ということが、家族にとっての大きな変化である。そして、子どもの人数が2人になるとさらに大きな変化となる（きょうだいの発生）が、子どもの人数がどんどん増えても人間関係の複雑さの面では、子ども1人がいる場合と比べて、さほど複雑さの変化の増大をもたらさないということである（林、2008）。つまり子どもの人数が倍になっても、人間関係の複雑さは倍にはならないということである。この点についての詳細は以前の研究の表を参照していただきたい。

また家族には個性があり家族性という。また家族ごとの差があり家族差という。多くの家族が自分の家族は他の家族とは違う点があると思っている可能性がある（林、2008）。

さらに親子・夫婦・きょうだい・祖父母などの相互作用・対人関係が家族の生涯発達に影響を与えている可能性が考えられる（林、2009）。

2. 家族の個性と類似性

1) 家族差の分類

家族ごとに異なった援助の必要性がある。その際には家族性ないし家族差を考えることが役立つ。家族性とは家族の個性である。また家族差とは、個人差に対応する用語で、家族ごとの違いを意味する用語である。以前の研究では、自分の家族は他の家族とは違う、と認識している家族が多いという結果を得た（林、2008）。そこで、ここでは家族のタイプを分類したい。

A. 標準的な家族だという認識のタイプ

B. 特殊な家族だという認識のタイプ

まずAの標準とは、一般的な普通の家族、という認識のことである。

一方Bの場合、なぜ自分の家族は標準的ではないと認識するのだろうか。それにはいくつかの理由が考えられる。第1に、親の職業的な理由であり、珍しい職業、少数派の職業、専門性の高い職業、一般的なサラリーマンとは異なる労働形態の職業などが挙げられる。この職業の理由からは、生活サイクルの理由を生み出すことがある。例えば、夕食が遅くなる、土日祝日が休日ではない、などの生活がみられる。第2に、家族の成員の理由、例えばシングル・マザー、シングル・ファーザーなどが考えられる。上記のこれらの2つ以外にも、自分たちが特殊な家族だという認識の理由があると思われる。

2) 家族の類似性

家族の個性、すなわち家族性に対して、家族のメンバーがそれぞれお互いに類似していると

ということがある。親子で似ているという認識があったり、家族の共通の習慣などである。これによって、家族という小集団の凝集性・同一性・連帯感・一体感をもたらすこともある。親子で類似する理由は、遺伝はもちろん、環境もある。ただし、似ていることを目の当たりにして自分の子どもなんだなと実感するときは、遺伝の影響が大きいと思うときではないか。

3. 両親を対象とした調査の試み

1) 問題

以前の研究と同様に、両親を対象として、子育てしている親の意識・発達などを明らかにする調査を試みる。今回は以前の調査で使用した質問項目のいくつかをここでも使用する。これにより以前の調査のエッセンスの部分在这里で再度調査して、経年による変化や子どもの年齢による違いなどを検討する。

2) 方法

①質問項目

以前の調査項目と同じものを使用して、経年による変化や子どもの年齢による違いなどを検討する。質問項目は全部で9項目ある。質問項目を分けるとまず第1に親の成長・発達に関するものである。第2に、親が子どもから受けた影響、という発達の相互作用に関するものである。第3に親子・家族の類似性に関するものである。第4に子どもの成長に伴う変化についてである。最後に子育て支援や教育の現状について尋ねた。

第1は「実際の子育ては、子育てのイメージや予想と違いがありましたか。あればそれは何ですか。」「親になって人間的・人格的に成長したと思いますか。あればそれは何ですか。」「親になって考え方が変わったなど、ものの見方に変化がありますか。あればそれは何ですか。」という、親の発達の变化についてのものである。これらは林（2005）で用いた質問項目である。

第2は「自分の子どもから影響を受けたと思うことはありますか。あればそれは何ですか。」という発達における親子の相互作用である。これらは林（2007）で用いた質問項目である。

第3に「親子で似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」「親子または家族で行動の仕方が似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」という、親子の類似性、家族の類似性についてである。これらは家族の個性とも言うべき家族性、ないし他の家族との違いを意味する家族差に関係するものである。これらは林（2008）で用いた質問項目である。

第4は「子どもの成長につれて、子どもとの接し方・かかわり方が変化しましたか。」「子どもの成長につれて、困っていることや悩んでいることが変化しましたか。」という子どもの成長に伴う親のかかわりの変化である。これらは林（2009）で用いた質問項目である。

最後は「現在の子育て支援あるいは教育の現状についてどう思いますか。」という現在の支援や教育の現状についてのものである。

②調査協力者

身近な子育て中の親に協力を依頼した。これまでの調査と同様にフェイスシートにおいて子どもの人数および年齢、そして家族が3世代家族か核家族か、その他かを尋ねた。

合計10名(父が回答したものが3名。母が回答したものが7名)。子どもの人数が1人が1名。子どもの人数が2人が4名。子どもの人数が3人以上が4名。子どもの人数が4人以上が1名。2世代家族(核家族)が7名。3世代家族が2名。世代について未記入が1名。

子どもの年齢は1歳以上2歳未満が3名(子どもの人数、以下同様)、3歳以上4歳未満が1名、4歳以上5歳未満が1名、5歳以上6歳未満が1名、6歳以上7歳未満が2名、7歳以上8歳未満が1名、8歳以上9歳未満が1名、10歳以上11歳未満が2名、12歳以上13歳未満が2名、14歳以上15歳未満が3名、15歳以上16歳未満が1名、17歳以上が6名。未記入が1名。合計25名。平均年齢およそ11歳(10.7歳)。

以上のように今回の調査ではこれまでのように幼児のいる家庭とは違い、中学生や高校生の子どものいる家庭が多かった。このことは家族が発達していく姿を捉えようとした研究には適したものであり、子どもの年齢にそった発達の变化を捉えることができると考えられる。

3) 結果と考察

結果においては、アンケートにより得られた回答の内容の趣旨を損なわないように適宜要約して示した。

①実際の子育てと予想との違い

「実際の子育ては、子育てのイメージや予想と違いがありましたか。あればそれは何ですか。」という項目に対しては、「予想とは違う、もっと楽だと思っていた、子どもは思い通りには育たない、子どもには難しい時期がある、子どもが逆に自分を育ててくれる、大変だけど楽しい」などが挙がっており、以前の調査の結果と同様の傾向が伺えた。

これらより、実際の子育ては、子育てする前のイメージや予想とはかなり違いがあったことが示唆されている。情報が氾濫していると言われている現代社会ではあるが、実際に子育てしてみると、予想とは大きな違いに驚くようだ。事前に子育てについて学んでいたとしても、実際に子育てをしてみないとわからないことは多い。

子育てにはお金がかかる、子育てはとても大変だ、とはよく言われていることである。しかし、こうした情報に触れているにもかかわらず、予想と実際の違いに驚くことが多いのはなぜか。

まず第1に考えられるのは、情報の曖昧さである。何が「大変」なのか、どのくらい「お金

がかかるのか、具体的にはっきりと示されることは少ない。従って、多くの親は真実をよく知らないまま子育てを始めているのである。

第2に考えられるのは、情報では真実を伝えきれないということだ。実際にやってみないとわからないということである。子育ての大変さを情報では伝えきれないということである。

第3に考えられるのは、情報を得た時点と、子育てを始めた時点とでは時間に差があつて、その差の間に、子育てが容易なものから困難なものに変わってしまったということだ。短い時代の変化とともに、子育てが難しくなってきたということである。

第4に考えられるのは、自分が実際に経験した大変なことは、強調・誇張されて表現される場合がある、ということだ。自己の体験を強調した結果、予想通りではなかったという表現になることがあるのである。しかも子育ては大変なものであるがゆえに誇張されやすくなり、誇張されたものの方が事実に近いものを感じられることがあるのだろう。

「子どもが逆に自分を育ててくれる」という意味の回答は、多くの親が実感しているものである。予想では親が子どもを育てるのだと思っていたが、実際は自分が子どもによって育てられていた、ということである。予想とは違うような、こうした貴重な経験が子育ての中でできるのである。

また、今回の調査では子どもの年齢が中学高校生が多く、以前の調査と比べて子ども年齢が高かった。従ってこのことが、子育ての予想と実際の違いを大きくさせているのかもしれない。こうした現象が発達の変化といえるかどうかは今後の課題である。

②親としての成長

「親になって人間的・人格的に成長したと思いますか。あればそれは何ですか。」という項目に対しては、「成長したと思う、おおらかな性格になった、子どもの幸せを願ったりする気持ちを持つようになった、非常識な行動を慎むようになった」などが挙げられた。また「わからない」もあったが、「成長があった」という趣旨の回答が多かった。

これらより、以前の調査の結果と同様に、多くの親が自分が親になってから成長したと感じていることが伺える。特に性格の面での変化としておおらかな性格、丸い性格になったことが挙げられる。また行動面でも人間的・人格的な成長が挙げられた。親になると、子育てを通して人間的な視野が広がることもある。また、ものの見方や考え方にも変化が現れるものだろう。

では具体的にはどのような変化がみられるのだろうか。そうした変化はなぜ生じるのか。

まず子どもとの生活を続けることにより、大人である自分とは違った子どものものの見方・考え方を知ることになる。そして大人である自分の価値観とは違う価値観に触れたりする。また子どもの行動の原則は大人とは違うものなので、その行動原理に触れて影響を受けたりする。さらに、子育てから生じる責任感・義務感もある。親はこうした影響を受けて、子どものものの見方・考え方を尊重する態度を身に付けたり、子どもの持つ行動を理解して対処する態度を身に付けたりするようになる。

親は子育てをしていくと、自分の親が自分にしてくれたことを思い出すことがある。すると、

自分の親が自分を育ててくれたことに感謝してその親の心情・子育てを深く理解する。それはさらに、自分の親の生活のみならず、何世代にもわたって続いてきた子育ての生活のありさまを理解することにつながって、人間の人生の一部を理解することにつながっていくかもしれない。要するに、親は子育てを通して生き方の理解が深まって、ものの見方・考え方がより幅広くなるという変化が生じる可能性があるということである。特に、子育てを通して以前とは違う価値観やものの考え方に変化することが意識されているようだ。

③親になってからの考え方の変化

「親になって考え方が変わったなど、ものの見方に変化がありますか。あればそれは何ですか。」という項目に対しては、「くよくよしなくなった、自分の性格がわかった、子ども好きになった、自分の親のことを考えられるようになった、反省することがある、変化はあるが親になったからかどうかは不明、自分の子どもの時を思い出す、金銭感覚、子どもに安全なものを食べさせたい」などが挙げられた。

このように、以前の結果と同様に、親になってから考え方が変わったという回答が様々にみられた。これらを大まかにまとめると、自分の性格への見方・子どもへの見方・生活態度などに分けることができよう。ものの見方が変わった結果、物事に前向きになったり、自分のこれまでのあり方が見えてきたりするようになったのである。さらに、子どもに対する理解が深まり、子どもへの見方が大きく変化したのである。また、経済的なことや生活の仕方などが変化していくのである。

以前の研究でも、子どもの誕生は親の生活全般をこれまでとは大きく変えてしまうという結果があったが、ここでは生活の仕方のみならず、親の性格や考え方も大きく変化することが示唆される。

そしてこうした考え方の変化は行動の変化へとつながっていくものだ。例えば子どもには安全な食を与えたいという変化は親の認知的な発達を示すものであるし、さらに食に対する実際の行動までも変化していると思われるものである。

ただし、変化はないという回答もあったし、わからないという回答もあった。以前の調査では父親の場合に変化がない傾向がみられていたが、今回の調査では父の場合と母の場合の両方にわからないという趣旨の回答がみられた。

この回答のひとつは、母親の回答で、親になったから変化したのか、別の原因があったためなのか、どちらなのかわからないという回答だった。これは親になってから変化したという回答に相当するものであるが、親になってからも様々な経験を重ねていくことが一般的であることから原因が見極めにくいという意味の回答である。そうした経験は親ならではの経験なのか、親でなくてもありうる経験なのか、ということは今回の調査ではわからなかった。

ただし父親の場合は、以前の調査と同様に回答の詳しい記述が少ないために、変化したのかどうかよくわからない、という趣旨の回答だった。母親と比べて父親は変化が少ないといえるのかもしれない。

いずれにしても、親になって考え方が変化したという回答は多く、親になるということは人間的にも、人格的にも、認知的にも発達的な変化をもたらすものだといえそうである。

④子どもから受けた影響

「自分の子どもから影響を受けたと思うことはありますか。あればそれは何ですか。」という項目に対しては、「思いやりの心、勇気、いろいろな見方、愛、人を比較していることに気づいた、言葉使い、子どものような好奇心、素直に表現する」などが挙げられた。

この質問項目では、親が子どもから受けた影響を尋ねている。その結果は、上述のように、思いやり・勇気・愛という心情、ものの見方、素直な表現、好奇心などだった。

先の項目で述べたのは、親の生活や性格が変化するということだったが、ここでは思いやり・勇気・愛という心情にあふれたものが多くみられ、回答の性格が異なるものだった。これらの子どもから受けた影響は、子どもの純粋な心情や無邪気な行動に触れたためのものだろう。

前回の調査の結果（林、(2007)の親の発達に関する質問項目）では、自然への関心・子どもについてのニュースへの関心などが増したこと、生活習慣の変化なども挙げられていた。今回の結果は、前回の結果と比べて、同じものも多いが、新たな影響も加えられている。

また、子育ては親が子どもを育てているだけではなくて、親が子どもから影響を逆に受けて、成長している可能性があるものである。つまり親と子どもは相互に影響を与え合っていて、相互作用しながら発達している側面もあるだろう。

⑤親子の類似性

「親子で似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」という項目に対しては、「感性、しぐさ、性格、考え方、怒り方、話し方、好み、趣味」などが挙げられた。

前回の調査では、感性や趣味という回答はみられなかったもので、今回の調査で子どもの年齢が上がったことが、感性や趣味という回答が得られた原因であるかもしれない。幼少期には、言葉遣い、話し方などの行動面・性格面で類似性がみられていた。一方、感性や趣味というものは子どもが幼少期には明確にはみられないので意識されにくいですが、大きくなってから親はそれに気づいて意識し始めるものであると考えられる。この親子の類似性の点については以下でも述べる。

⑥親子または家族の行動の類似性

「親子または家族で行動の仕方が似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」という項目に対しては、「親と同じスピードで子どもが行動する、行動のペース、生活パターン」などが挙げられた。また「思わない」という回答もあった。

先の項目では親子の類似性についてのものだったが、この項目では親子や家族の行動の類似性を尋ねた。その結果、親子や家族の行動についても類似性がある可能性を伺わせた。

以前の調査でも、親子で似ていることが多いという傾向がみられていた。その内容としては、

話し方・行動・性格・感情表現を中心に捉えられていた。また似ている内容として欠点や短所に注目されやすいという傾向がみられていた。

今回の結果でも、話し方・行動・性格などの点で親子の類似性がみられ、多くの親が親子で似ていることがあると認識していることがわかる。特に今回は、感性、好み、趣味、考え方などの子どもの年齢が大きくなるにつれて発達してみられるようになる点でも、親子の類似性がみられた。このことは、子どもが親の影響を受けて、親子が似てくるように発達している様子が伺えるものである。

こうした親子の類似性は、親子の一体感を生じさせ、家族の連帯感に寄与することもあるだろう。また自分の子どもであるという実感や親子のつながりを時には意識させることもあるだろう。

一方で、親子の行動が似ていないという回答もあった。親子だから必ず似ているというわけではないし、親が子どもと似ていると常に認識しているとは限らないということが明らかとなった。もしも親子が行動の面で客観的に見て似ていたとしても、第三者的な立場で見えない限り、その当事者の親が子どもとのその類似性に気づくことは難しいことかもしれない。

⑦子どもとの接し方の変化

「子どもの成長につれて、子どもとの接し方・かかわり方が変化しましたか。」という項目に対しては、「大人と同等の生活ができるようになった、子どもが主張するようになった、言葉使い」などが挙げられた。

この項目は子どもの発達に伴う親の接し方の変化を尋ねている。その結果、親の接し方が変化したという回答が様々にみられた。

その変化の内容としては、子どもが身辺自立を達成して大人と同様に生活できるようになったり、子どもが自己主張をするようになったりしたことに対するものである。親の子どもに対する言葉遣いも変化するのである。

前回の調査でも、親は子どもの成長に伴って子どもとの接し方の変化を感じていたが、今回は子どもの年齢が以前よりも上がったためなのか、前回よりも変化したという回答が多いように思われた。

子どもの年齢が以前よりも高くなれば、それだけ親は子どもとの接し方を変化させる必要に迫られるといえる。このように、親子は接し方においても発達的な変化をみせているといえる。

⑧悩みの変化

「子どもの成長につれて、困っていることや悩んでいることが変化しましたか。」という項目に対しては、「変化した」が多く挙げられた。このことより子どもが発達するにつれて、親が関わらなければならないことが変化していくことが明らかとなった。他には「ともに成長、あまり変化なし、去年の服が着られなくなる」などが挙げられた。

先の項目では親の接し方の変化であったが、ここの項目では悩みの変化を尋ねるものであ

た。その結果、悩みが変化したとする回答が多く、親や家族の発達とともに課題や問題が変化することが示された。

この項目でも、今回は子どもが大きかったこともあり、変化したという回答が多くなったように思われる。

⑨現状の認識

「現在の子育て支援あるいは教育の現状についてどう思いますか。」という項目に対しては、「携帯やゲームなどが普及して人とのつながりが不安になる、お金がかかる、お産の場所が減少している、子育てにおける家庭の重要性が認識されていない」などが挙げられた。

この項目では、今後の子育て支援に何が必要なのかを知る手掛かりを尋ねている。その結果、子どもを取り巻く環境の問題、経済的な問題、人々の意識の問題などが挙げられた。これらは以前の調査結果と同様だった。

⑩まとめ

子育てが予想以上に大変なものだったという認識は前回同様にみられた。親として成長したかどうかについては認識のない場合もみられたが、少なくとももの見方や考え方などの変化がみられたことは確かなようだった。子どもから受けた影響も様々にみられた。親子の類似性は、話し方・行動・性格の面でみられたのは前回同様だったが、今回は新たに感性・趣味などが加わった。子どもとの接し方や悩みの変化は今回は年齢が高くなったために、前回以上により強くみられた。

文 献

- 林 昭志 2005 親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み 上田女子短期大学紀要 第28号 pp.11-18.
- 林 昭志 2006 親を生涯発達の観点から捉える試み——乳幼児期の親の発達について—— 上田女子短期大学紀要 第29号 pp.1-9.
- 林 昭志 2007 親を生涯発達の観点から捉える試み（その3）——親の発達権と家族の発達—— 上田女子短期大学紀要 第30号 pp.19-28.
- 林 昭志 2008 親を生涯発達の観点から捉える試み（その4）——家族の個性と親の発達—— 上田女子短期大学紀要 第31号 pp.27-36.
- 林 昭志 2009 親を生涯発達の観点から捉える試み（その5）——家族の中の対人関係・相互作用と発達—— 上田女子短期大学紀要 第32号 pp. 35-46.